

さぼっていた世話

二年 渡邊慈温

中学生に入ったからか、自分が飼いたいと言った犬の世話をしなくなった。

ある日、部活が終わりいつも通り友達と帰って来た。家の中に入ると、泣いていたお母さんとずっと座りこんでいる愛犬が居た。あわてたほくは、すぐかばんをすてお母さんの元に行った。理由を聞くと、足がひどいだつきゅうで手術しないと治らないと教えてくれた。すぐにお母さんに手術をしようと言おうとしたが、手術をしても治るかわからない。この一言ですぐに、手術をしようなんて言えなかった。次の日、みんなは明るく犬の世話をしていたが、ほくはなにもできなかった。その時は悲しみがあったのかもしれない。でも、ある日姉がゲージを開けると奥の部屋に居たほくの所にゆっくり、ゆっくりと来てくれた。それを見たほくは、ピース(犬)がこんなにがんばっているのになぜほくは何もしてあげないのだろう。ピースが近づいてくる姿に元気をもらいました。その時、初めてピースのためにもっと何かしてあげようと思った。ピースは今7さい、さいていでもあと5年は生きれる。そう考えたほくは気持ちを变えてあと5年間ちゃんと世話をしようと思った。その日はちょうど日曜日、ぐったりしてた体のせいで世話をしようと思う気持ちがでなかった。その日の夕方、近くのコンビニ

へ行こうと思って外を歩いてた。そしたら、近所の人の犬が散歩していた。それを見たほくは、ピースの事を思い出した。その時、悲しいのかくやしいのか知らないが涙がでてきた。その時、初めて思った。歩ける事はふつうじゃない、歩ける事は幸せ。人間は、ふだんふつうかのように歩いている。それは、ふつうではない、幸せなんだと思った。次の日から、しっかりと世話をがんばった。

そんなある日、ピースが歩けるようになった。ゆっくりだがちゃんと歩ける。ほくは、しっかりと世話をして良かったと思った。ほくは、陸上部に入っている。ピースは歩けるが走れはしない。だから、その分ほくが走ろうと思った。毎日、部活の時には今日も走れることに感謝して走っている。走れる事への喜びと感謝を忘れずにもっと強い選手になりたい。

これから、家族の思いを一つにしてくれた。ピースに感謝し、これからも楽しく笑顔絶えない家族になっしていきたい。